



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 臨床死生学・老年行動学研究分野の発展を願って                                                      |
| Author(s)    | 藤田, 綾子                                                                      |
| Citation     | 生老病死の行動科学. 2014, 17-18, p. 7-8                                              |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/36365">https://doi.org/10.18910/36365</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 臨床死生学・老年行動学研究分野の発展を願って

(甲子園大学) 藤田綾子

臨床死生学・老年行動学研究分野の研究室が開設されて20周年を迎えましたことをお祝い申し上げます。

この輝かしい20年間の中で、私が在籍したのは5年6ヶ月間の短い期間でしたが、この間に8名の方が学位を取得され、そのお手伝いをしながら（足を引っ張っていたかもしれませんが?）、自分自身も学位を取ることができた充実した時間でした。

研究室は、初代の教授柏木哲夫先生が10年間をかけて基礎固めと方向性を導いてくださり、恒藤先生と平井先生がしっかりサポートして下さっていましたので、私はその路線を少し延長することができたのかなという気持ちです。以下に当時のあれこれの思い出を綴ってみたいと思います。

赴任して初めに取り組んだのは「生老病死の行動科学」でした。それまで「年報」は発行されていましたが、学術雑誌として認められるようなものを研究室で発行したいということでも生まれました。雑誌の発行は、原稿を書き、編集作業をし、校正、業者との打ち合わせなど大学院生にとって、学業・研究の傍ら行わなければならないことですので大変だったと思います。しかし、多くの優秀な論文を世に出すことができ、これまで研究室のみんなで協力して発行し続けられていることを大変うれしく思います。雑誌の名前は、生きがい、老いること、病気を持っていること、死に行く人たちの心に取り組む研究室の雑誌の名前としてはうってつけだと思い、今でもとても気に入っています。何よりも、小さな研究室で一つの雑誌を発行することは大変ですが、書く立場だけでなく編集する立場から研究論文とは何かを考えさせてもらえる体験を身近なところで出来ることは大変貴重な財産だと思います。

次に取り組みたいと思ったことが研究の方法でした。心理学の研究方法として文献研究・観察・実験・調査・面接などがあります。

「面接研究」については、ガンの患者さんを中心とした大変難しい現場でまさに、「臨床」という冠を抱えている研究室にふさわしい研究が行われていました。博士論文の中テーマとしても取り上げられ、多数の研究が行われていました。「調査研究」については、高齢者の介護・認知症・生きがいなどのテーマを中心に、高度な統計分析研究が行われていました。しかし、「実験研究」はあまり行われていない状況でした。私は、行動の「因果関係」の証明は最初と最後は「実験研究」という思いがあり、何よりも、「面接」や「調査」と同じくらい「実験研究」の大事さも学んで欲しいという思いがありました。

そんな思いの中、平井先生のおかげで大きな科学研究費が獲得でき、そのほか、研究科内の競争資金の援助などで実験研究を行なえる資金的条件は整いましたが、問題の実験室がありませんでした。にもかかわらず、空き教室で机を移動して、シルバー人材センターの空き部屋で、他の研究室の実験室の空いている時間帯で記憶、認知、転倒などの実験が卒論、修士論文、博士論文として次々に展開されるようになったことが嬉しい出来事でした。

先日新しくなった研究室におじゃましましたら、なんと「占有」の実験室が設置されました。研究の中には、調査が適切な内容があれば実験でしか明らかにできない内容もあります。これからは多様な側面からの研究がますます展開されていくことを期待したいと思い

ます。

私が心残りであったことが研究室のグローバルゼーションでした。最後の3月にDr.K.W.SchaieとS.L.Willisを迎えてセミナーを開くことができたことがせめてもの救いでした。彼らの研究成果がすさまじいほどの努力と行動力によって行われていることを直接聞くことがで、若い人たちにも伝えることができたのではと思います。

幸い、佐藤真一先生、権藤恭之先生、中川威先生は世界に目を向けた研究活動を精力的にされていますので、そのことが研究室全体のグローバル化を一気に進めてくれていることを嬉しく・頼もしく眺めています。

最後に、若い皆さんへのお願いです。研究室が開設されて20年ということになりますが、この20年間の間に社会も大きく変化してきました。高齢者について言えば、20年前は「介護保健」などありませんでした。そんな時代の介護と今では意識も使える資源も大きく異なっています。現在の1年生はまだ生まれてもいなかったのですから、その間の流れの中で「生老病死」に関する問題も医療・社会福祉・保健・意識の変化によって変化し、社会から求められているテーマも変わってきています。

そして、私たちは、社会の仕組みによって大きく影響されやすい人たちの問題に取り組んでいることも忘れてはなりません。しかし、時代がどう変わろうと変化させてはいけないのは「研究への取り組み態度」です。私たちが取り組んでいるテーマは、個々人ひとりひとりが幸せに生きることをお手伝いするために何ができるかという考えを常に心の奥に持っていて欲しいと思います。いつも、自分の研究のために相手の気持ちをおろそかにしてはいないかということを考えていて欲しいと「高齢者の一員」としても強く願っています。

最後になりますが、これからの「臨床死生学・老年行動学研究分野」のますますの発展と皆様のご健勝をお祈りいたします。